

拉致問題の解決に向けて

〔拉致問題について〕

愛媛県教育委員会



「すべての拉致被害者を救出するぞ！
国民大集会 in 愛媛」

1970年代から1980年代にかけて、多くの日本人が不自然な形で行方不明となりましたが、これらの事件の多くには、北朝鮮による拉致の疑いもたれています。日本政府は、これまでに17名を北朝鮮による拉致被害者として認定していますが、この他にも拉致の可能性を否定しきれない事案があり、本県でも該当する方がおられます。

2002（平成14）年9月に北朝鮮が日本人拉致を初めて認め、10月に5人の拉致被害者が帰国しましたが、他の被害者については、未だ北朝鮮から安否に関する納得のいく説明はありません。北朝鮮による日本人拉致は重大な人権侵害であり、北朝鮮に残されているすべての拉致被害者の安全を確保し、速やかに日本に連れ戻さなくてはなりません。

拉致問題が明らかになった後も、国民の関心は必ずしも高いものとはいえませんでした。しかし、拉致被害者家族や支援者の地道な活動をきっかけに、2006（平成18）年6月に「拉致問題その他北朝鮮当局による人権侵害問題への対処に関する法律」（北朝鮮人権法）が制定され、国や地方公共団体は、拉致問題の解決と国民世論の喚起に努めています。また、毎年12月10日から16日を北朝鮮人権侵害問題啓発週間と定め、「拉致問題を考えるみんなの集い」の開催や各種メディアによる広報等、様々な活動を繰り広げています。

2008（平成20）年3月に、人権教育の指導方法等に関する調査研究会が出した「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕実践編」でも、その他の人権課題として「北朝鮮当局によって拉致された被害者等」を取り上げ、学校教育での取組を求めています。そこで、拉致問題に関する参考資料（教職員用）として、本資料を作成しました。

〔拉致問題の主な動き〕

1970～1980年代	多くの日本人が不自然な形で行方不明となる
1990年代	政府は、たびたび、北朝鮮に対して拉致問題を提起したが、北朝鮮側は頑なに否定する
1997年 (平成9年)	10月 「北朝鮮による拉致被害者家族連絡会（家族会）」が結成されたものの、国民の意識は低かった
2002年 (平成14年)	9月 第1回日朝首脳会談が開催され、北朝鮮が日本人の拉致を初めて公式に認めて謝罪する 10月 愛媛県議会で「日朝国交正常化交渉の再開と日本人拉致事件の優先的且つ徹底的な全容解明に関する意見書」が議決される（以後、同様の意見書等が採択される） 10月 5名の拉致被害者が帰国する
2004年 (平成16年)	5月 第2回日朝首脳会談が開催され、拉致被害者の家族5名が帰国する
2006年 (平成18年)	6月 「拉致問題その他北朝鮮当局による人権侵害問題への対処に関する法律」（北朝鮮人権法）が制定される 毎年12月10日～16日を北朝鮮人権侵害問題啓発週間と定める
2008年 (平成20年)	7月 「すべての拉致被害者を救出するぞ！国民大集会 in 愛媛」が松山で開催される 7月 北海道洞爺湖サミットの成果文書に拉致問題が明記される 12月 国連総会本会議で、北朝鮮に対し、拉致問題を早急に解決することを強く求める決議が採択される

（参考 内閣府拉致問題対策本部ホームページ）

指導上の留意点

人権・同和教育は、人々の偏見や差別意識を解消することによって、同和問題をはじめとする様々な人権問題の解決を図るものです。拉致問題も重大な人権侵害であり、一日も早い解決が望まれます。しかし、この問題は国家による犯罪行為という特異な人権問題でもあるため、他の人権問題のように人々の意識を変えるだけでは簡単に解決できない内容が含まれます。

そのため、次のような点に配慮しながら、指導に当たることが求められます。

- 社会科や公民科の教科書には、2002（平成14）年に日朝首脳会談で北朝鮮が日本人を拉致した事件が問題となり、拉致被害者一部とその家族が帰国したものの、多くの課題を残しているといった内容の記述がある。他の教科等で指導する場合は、教科書記述との関連を図りながら指導する。
- これまで人権・同和教育が培ってきた「被差別の立場に立つこと」「人と人がつながり、仲間が手を携えること」などの視点に立ち、同じ人間として被害者や被害者家族等の心の痛みや叫びに共感する心情を育てる。
さらに、拉致行為に対する憤りをもつとともに、この問題の背景を正しく認識したうえで、問題の解決を図ることの重要性を押さえる。
- 児童生徒の発達段階や学校・家庭・地域の実情等に配慮しながら、解決していかなければならない問題の一つとして拉致問題を捉えさせる。
また、指導に当たっては、拉致問題は北朝鮮という国家の犯罪であり、北朝鮮の国民や在日朝鮮人の人々には責任はないことを押さえ、教育の中立性に十分配慮する。

参考

個別の人権課題を取り上げて指導する場合は、「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕実践編」にも次のような記載があることを、事前に教職員が確認して指導に当たる。

- 個別の人権課題に関する学習を進めるに当たり、児童生徒やその保護者、親族等の中に、当該人権課題の当事者等となっている者がいることも想定される。教職員の無責任な言動が、児童生徒の間に新たな差別や偏見を生み出すことがあることを認識するとともに、個人情報の取扱いには、十分な配慮を行う必要がある。
- 教職員においては、個別の人権課題の指導に取り組むに際し、まず当該分野の関連法規等に表われた考え方を正しく理解するとともに、その人権課題にかかわる当事者等への理解を深めることが重要である。

参考教材紹介

— DVDアニメ「めぐみ」—

1977（昭和52）年に中学生だった横田めぐみさんが、学校からの帰宅途中に北朝鮮当局により拉致された事件を題材に、残された家族の苦悩や、懸命な救出活動の模様を描いた25分のドキュメンタリー・アニメです。

出典：北朝鮮による日本人拉致問題啓発アニメ



指導事例の紹介

～ 小学校第6学年 総合的な学習の時間の事例 ～

1 拉致問題に取り組むに当たって

総合的な学習の時間のメインテーマを「人権」とし、生活の中にある様々な人権問題を自らの課題として捉え、その解決を図るために追究活動を行う。様々な人権問題のうち、この單元では、日本と外国との関係において拉致問題を取り上げ、4時間扱いで取り組む。

指導に当たっては、教職員間で十分協議し、児童・保護者・地域の実情に応じて、指導内容を工夫することが必要である。

2 ねらい

拉致問題について、自分たちの課題を調べることを通して、拉致被害者や被害者家族の心の痛みや叫びに共感させるとともに、この問題に関心をもたせる。

3 展開

学習過程	学 習 活 動	時 間	指導上の留意点
課題設定	1 ブルーリボンを見て思ったことを発表する。 2 DVDアニメ「めぐみ」を視聴し、感想を出し合う。 3 学習活動1・2を基に学習課題を設定する。	1	<ul style="list-style-type: none"> ○ ブルーリボンにどんな意味があるのか予想させたあと、このリボンは、拉致問題に関係があることを知らせる。 ○ 自分たちの興味や関心を基に、具体的に調べてみたいことを課題として明確に設定するように助言する。
	〈学習課題例〉 ◎ <small>らちひがいしゃ</small> 拉致被害者の家族の人たちは、どのような活動をしているのだろう。 ◎ 国や県は、拉致問題解決のために何をしているのだろう。 ◎ ブルーリボン運動とはどんな運動だろう。		
課題追究	4 設定した課題別にグループを作り、調べ学習を行う。	2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 似ている課題を選んでいる者同士でグループを作らせる。 ○ 理解の難しい内容については、補助資料を用意して児童の活動を支援する。 ○ 拉致被害者や被害者家族の思いを考えながらまとめるように助言する。
まとめ	5 調べたことを課題グループ別に発表する。 6 学習のまとめをする。	1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 時間を決めて、ポイントを簡潔に発表させる。 ○ 拉致問題の学習を通して、分かったことや思ったこと等をまとめさせ、この問題に関心をもたせる。

指導事例の紹介

～ 中学校第3学年 道徳の事例 ～

1 拉致問題に取り組むに当たって

国民が拉致問題に関心をもつことがこの問題の解決には欠かせないことを踏まえ、社会科等において拉致問題に対する理解を深めたうえで、DVDアニメ「めぐみ」を教材にして学習する。

指導に当たっては、拉致によって引き裂かれためぐみさんを思う両親の心の痛みや叫びに共感させ、拉致問題の解決を自分の問題として捉え、自己の生き方を考える契機とさせる。

2 ねらい

めぐみさんに対する両親の思いに共感させ、共に手を携えて、だれもが安心して生活できる社会をつくっていかうとする心情を育てる。

3 展開

学 習 活 動	○主な発問	○指導上の留意点
1 拉致について考える。	○ 拉致という言葉からどのようなことが思い浮かびますか。	○ 社会科の教科書における拉致問題に関する記述についても確認させる。
2 DVDアニメ「めぐみ」を視聴する。	○ 皆さんと同じ中学生の時に拉致された横田めぐみさんのDVDアニメ「めぐみ」を見ましょう。	○ 拉致されためぐみさんやその家族の思いを想像しながら、視聴させる。
3 DVDアニメ「めぐみ」を基に話し合う。 ○ めぐみさんがいなくなった時の両親の気持ち	○ めぐみさんが突然いなくなった時、両親はどのような気持ちだったでしょう。	○ 拉致されたとは、想像もしなかったことに気付かせる。 ○ 拉致によって引き裂かれたわが子を思う両親の悲痛な気持ちを想像させる。
○ 街頭で救出を呼びかける両親の気持ち	○ 街頭で救出を呼びかける両親は、どのような気持ちだったでしょう。	○ 全国を巡り、この問題についての正しい理解と協力を求めて必死で活動する両親の姿に、共感させる。
○ 記者会見での両親の気持ち	○ 「めぐみのことを愛してくださった皆様に感謝します」という言葉をどう思いますか。	○ 自分たちの思いに寄り添い、支えてくれた人々に対する感謝の言葉であることに気付かせる。
4 拉致被害者家族に対する思いを発表する。	○ 拉致被害者家族へメッセージを書いて発表しましょう。	○ 拉致被害者家族の思いを自分のこととして捉え、協力してよりよい社会の実現に取り組もうとする意欲を高める。

指導事例の紹介

～ 高等学校 ホームルーム活動の事例 ～

1 拉致問題に取り組むに当たって

現代社会等の授業において拉致問題に対する理解を深めたうえで、DVDアニメ「めぐみ」などを教材として、拉致問題を人権問題の一つとして学習する。

指導に当たっては、校内研修等の機会を利用して、教職員間で拉致問題に関する共通理解を図る必要がある。また、拉致問題の解決を自己の課題として受け止め、どのような形で自分がかかわっていけるかを考えさせる。

2 本時の目標

- 拉致問題を人権問題の一つとして捉え、この問題への理解を深めさせる。
- 拉致被害者家族の思いや願いに共感し、拉致問題の解決に向けて共に歩んでいこうとする意欲や態度を育てる。

3 展開

	活動内容	指導上の留意点
活 動 の 展 開	<p>1 拉致問題について理解する。</p> <p>2 DVDアニメ「めぐみ」を視聴する。</p> <p>(1) めぐみさんがいなくなった時の両親の気持ちを考える。</p> <p>(2) 街頭で救出を呼びかける両親の気持ちを考える。</p> <p>3 拉致問題の学習を通して、学んだことを発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none">○ 拉致問題の背景について、年表や資料等を用いながら理解させる。○ 拉致されためぐみさんや、後に残された家族の思いを想像しながら視聴させる。○ 悲嘆にくれる両親の姿に自分の家族を重ね合わせることによって、自己の問題として考えさせる。○ 拉致問題の解決に向けて、自ら立ち上がった両親の姿に共感させる。○ 拉致被害者家族の思いが、国や多くの人の心を動かし、拉致問題の解決に向けて、様々な取組が行われるようになったことを理解させる。○ 拉致問題への関心と認識を深めていくことが大切であることを理解させたうえで、この問題の解決に向けて自分に何ができるかを考えさせる。
評 価 の 観 点	<ul style="list-style-type: none">○ 拉致問題について関心を持ち、理解を深めることができたか。○ 拉致問題の解決を自己の課題として受け止め、この問題の解決に向けて自分に何ができるかを考えることができたか。	

拉致被害者家族・特定失踪者家族の思い



《特定失踪者家族》
左から長島さん、二宮さん、大政さん



《拉致被害者家族》
左から飯塚さん、横田さん、有本さん

由美は、平成3年3月28日、考古学に興味を持ち、韓国の慶州に観光旅行に出かけまして、28日に行方不明になり、今に至っております。

会場にお越しの皆様、北朝鮮に対する怒り、そして捕らえられている拉致されたすべての人々を取り返すんだという思いを、今日からまだまだ持ち続けていただいて、「取り返してやる」という声が北朝鮮に届きますように、どうかこれからもご支援のほど、よろしくお願いいたします。

(「すべての拉致被害者を救出するぞ!国民大集会 in 愛媛」での大政悦子さんのメッセージ 2008(平成20)年)

家族の思いに寄り添い、共に歩んでいくことが大切です

遺骨と同時に、北朝鮮から返された写真をもつてくれました。中学校の制服の白いブラウスを着た写真です。あの白いブラウスの写真は、めぐみがいなくなって半年か一年後、私たちが必死で娘を探しまわっていたころの写真なのです。長いあいだ、ずっと探していて何にもわからなかったのに、こんなところでこんな写真を撮られて、こんな目をして座っている。

あの写真は本当に酷いものでありました。あんなに明るく、元気だった、「今日は、お母さん、こんなことがあったよ」と毎日玄関から、学校でのありさまを明るい声で教えてくれた、また大きな声で歌をうたいつづけていたあの子が、怯えた目で、悲しい目で、「お母さん、私はどうしたらいいの」という目で私たちを見つめていました。

「助けて」と言いたくても言えない。

「めぐみちゃん、こんなところにいたのねえ」

私は思わず写真をなでて、

「探していたけれど、わからなかった……。助けてあげられなくてごめんね」

涙が止まりませんでした。二人の弟たちも、声を出して泣きました。

【「めぐみへ 横田早紀江、母の言葉」 横田早紀江著 草思社刊 P.78・P.79】

※ 拉致問題について、更にくわしく知りたい方はこちらのホームページをご覧ください。

<http://www.rachi.go.jp>